

危機一髮三四郎

城戸禮

春陽文庫



春 陽 文 庫

危機一髮三四郎

城 戸 禮



0193—040555—3066



春 陽 文 庫

危機一髪三四郎

昭和 52年 8月 20日 第1刷発行

昭和 54年 7月 30日 第6刷発行

著 者 城 戸 禮

1977 ©

発行者 和田欣之介

印刷 城北印刷製本センター

発行所 株式会社 春陽堂書店

東京都中央区日本橋三丁目四番一六号

電話 (二七二) 〇〇五一番

振替東京 一六一七番

乱丁、落丁のものは本社、またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

目次

二人のタフガイ		二
おれの拳銃は素早い		六
0081は美女		元
襲撃者どもの銃弾		七
射殺された悪人ども		三
殺人許可証		六
手には拳銃女はベッド		九
女はおれに任せろ		一五
襲撃また襲撃		二四
替え玉作戦		四二
美女誘拐作戦		一六
地獄へのパスポート		一六
どこかに時限爆弾が		一五
タフガイの鉄拳攻撃		二〇
絶妙回転撃ち		二二

危機一髮三四郎

二人のタフガイ

1

「ううっ」

声にならないうめき声をもらしたとき、もう相手の体は三、四メートルも向こうに、はじき飛ばされていた。

「こっ、こいつッ」

二番目の男の右手が、サッと内懐へ突っ込まれるより、一瞬早く、
「ぐっ、ぐえっ」

前のめりにタターッと五、六歩もつんのめると、たたきつけられたカエルのように、そいつが床の上でのびていた。

目にも止まらぬ竜崎三四郎の片手打ちを、首筋に思いきりくらったからである。

続いてガガッと二撃。肉を打つ不気味な音もろとも、横手にいた二人の男が右と左にふっ飛んだ。これまた、電光石火と称したい左ストレートと右フックの強撃であった。

「いやあ、ご苦労ッ。やったなッ、おいッ。こっちもごらんのとおりでッ」

田島讓二が、すでに大の字なりにぶっ倒れてのびている、足もとの二人の男のほうを指さした。「ご苦労だと？ よせ、こいつめ。どうしておまえときたら、行く先々でこうもめごとを起こすんだ？」

あきれたようにいったが、三四郎がのしたのも、讓二が殴り倒した相手も、いずれも若くて屈強なやつらばかり。

「そういうなよ。おれといたしましてはだ、もめごとなんか起こす気はサラサラねえ。ところがだな、そう思ってるのに、なんとなくこんなことになっちゃう。いったい、どうなっちゃってんだらうな」

ケロリとした顔つきで、讓二がいう。

「とぼけるな、こいつめ。自然にこうなるんじゃないくて、その原因をこしらえるのは、いつもおまえなんだぞ」

ここは、ちょいとばかり豪華なナイトクラブの一隅の、スナック型式のバー。隅にあるのと、二人の動きがあまりに早かったせい、五人ものしたにしては、客もボーイもこの場の気配にまだ気づいていない。もっとも、カウンターの向こう側にいる三人ばかりのバーテンが、声を立てるのも忘れてあつけにとられ、啞然として二人をまじまじと見つめていたが……。

「分かった、分かってるんだ。イカスカわい子ちゃんがいると、おれがもめごとを起こすといいたいんだらう」

ニヤリと笑った。

年齢は三十二、三で身長一メートル八〇。すらっとして均整のとれた体つき。それに美男とは

いえないが、どことなく女に好かれそうな容貌ようぼうの持ち主。

「そのとおりだ。おまえの欠点は女に目がないこと。それも、これとねらったら、他人の女だるうとかなんだろうと見境がないんだから、始末が悪いよ」

「ちょいと待ってくれ、竜崎よ。それをいうならば、欠点じゃあなく、美点といってもらいてえもんだ。イカス女が一人でいらせられたら、お声をかけなきやあシツレイってもんだ。それにだ、あたしはだれだれの女でございと、いちいち名札をぶらさげちゃあいねえから、仕方があるまい」
たいへん都合のいい理屈を並べて、またニヤリと笑った。憎めない笑顔だった。

「負けたよ、おまえには。だが、あんまりもめごとを起こすな。そういうときに、いつも手伝わされるのは、このおれだ。片づけ係に雇われたわけじゃあないんだぜ」

苦笑いをした三四郎は、三十前後。背丈も体重も譲二と同じくらいだが、こっちはスカッとして、男でもほれぼれするような、男性的な美男子だった。

「おいおい。片づけ係のほうが、おれより手が早い。その証拠に見ろよ、おれがのしたのは二人だが、そっちは三人だぞ」

まだのびてるやつらを指さし、

「だが、おまえがいてくれると、何かにつけて便利だよ。そっちがじゃまなやつらをのしてくれる間に、こっちはかわいい子ちゃんと物語れるからな」

いいかけて、ひょいと振り返ったと思うと、

「おやッ、いねえッ。おいッ、どこへ行ったんだッ。ここにいたかわいい子ちゃんはッ？」
バーテンに、譲二が聞いた。

「は、はいッ。あのお客さまがそいつらをのしてる間に、お帰りになりましたがッ」

「なに、帰った？ ハンサムなこのおれにごあいさつなしでか？」

二人がここへきて十分とたたないうちに、やはりスツールに腰かけ、ブランデーを飲んでいたややグラマーの二十三、四の女に、のびてるやつらがじゃれはじめた。

それを見て、女、特にイカス女にはご親切な譲二が、割って入った。

ところが、意外に相手のやつらの手が早く、問答無用ッとばかり殴りかかってきたが、こっちのほう役者が二枚も三枚も上。結果はあつという間もなく、二人の効くこと無類のゲンコツをくらい、全員ながながと床の上にのびてしまったのだった。

「ハッハッハ、せっかくのお目当てがドロンか。いいところをごらんにいれたのに、むだ骨だったらしいな」

三四郎が吹き出したが、相当の女でも二人の暴れっぷりを見せられては、逃げ出したくなるだろう。

「まったくだ。今夜はベッドが広すぎるってことになりそうだぜ」

苦笑した譲二に、

「それでもあるまい。どうせおまえのことだから、ひとりでおネンネするはずはない。ベッドの生きてイキのいいアクセサリーを見つけるにちがいなからう」

何をやらしても素早い、女好きも天下無類。ダブルベッドにひとり寝るなんて、不経済なことはいない譲二だった。

「もちろん、その点には抜け目はねえが、あわやこれからというときに、不粋なシグナルでオジ

ヤンになることがあるんでな」

ニヤリと片目をつむって、ウインクした。

「ああ、そのことか。しかし、仕事仕事、と思ってあきらめろ」
これまたウインクすると、

「行こう。しばらくご命令がなかったが、今夜あたりはありそうだ」
謎なぞのようなことを小声でいうと、

「これでなんとかしとけ。こいつらの片づけ料も含めてだ」

一万円札を二、三枚、カウンターの上へほうり出しながら、バーテンに足もとのやつらをあごでしゃくり、もうさっさと三四郎は入り口のほうへ、ノッシノッシと大股おおまたで歩きだしていた。

「待て、待てよ。おい、おれを忘れるなよ」

続いて譲二もあとを追ったが、この小気味がいいくらい颯爽さつそうとした二人の壮漢は、いつたい何者なのであろうか？……

2

「チェッ、だからいったんだ。これからいいところっていうと、たいてい気のきかねえ指令がくるってな」

舌打ちしながら、ベッドに半身起こし、サイドテーブルの上の金色のライターを取りあげたのが譲二。その上半身は裸だった。

「何をブツブツいってんのよ。せっかくのムードが壊れるじゃないの」

けげんそうに見あげたのが、二十一か二の若い女で、これまた思い切りよく裸姿。やや汗ばんだ見事なくらいのオッパイから、きゅっと締まった胴のあたりまであらわだが、その下のほうもおそらく、何も着けてはいまいし、がっしりとした譲二のたくましい体の下となれば、たしかにいいことの最中にちがいない。

「がまんしろ。仕事仕事。これがおれの商売なんだから」

相手の体から降りようとせず、カチリとライターを音させて、耳に当てがう。

このライターは精巧で特殊の超音波通信機ちようおんぱになっている。

「商売？　なんだか知らないけど、妙な商売らしいわね」

女が譲二の背に手をまわし、厚い胸にその顔をうずめたが、その表情にはこっそりとした情事を期待する色が、濃く漂っていた。

「こら、くすぐりたい。いい加減にしろ」

そういいながらも、ライターに耳を当ててるが、絡み合った脚はそのままだ。お体とお体の営みは決しておきらいじゃない証拠だろう。

「やっぱり、仕事だ。どうやら急いで出かけなきゃならん」

絡んでいた脚をほどいたが、どっちの太腿ふとももも適当に汗でぬれていた。

「出かける？　こうなっちゃってるのに？　やる気ならすぐすむのよ」

女が未練たらしく鼻を鳴らす。

「おいおい、おっぱじめたらすぐすむタマかよ、おまえは。こっそりたっぷり、少なくとも三十分や一時間はかかるぜ。なにしろ、ハゲシイからなあ」

そういいながら、やっと相手の裸の体から滑り降りる。

「さあ、それはどうかしら？　ハゲシイのはそちらも同じらしいけど」

素早く女が譲二のくちびるを強く吸った途端、ボリュームのある相手の乳房が、譲二の胸をくすぐるように柔らかく押した。野郎といたしましては、悪い感触ではなかった。

「そりゃあもちろんさ。おねがいする時には、こつてりと徹底的にたのしむのがおれの主義だな。しかし、男には仕事がある。そっちもおネンネする以上に大切なんだよ、うん」

シーツを腰のあたりに巻き、ベッドから降りると、

「ちよいとシャワーを浴びて出かける。おれがもどってくるまで、ひとりでサミシイだろうが寝ていいぜ」

シーツを取られ、ベッドの上にはほとんど全裸の姿をさらしている相手の、ピンク色の乳首のあたりをピンとはじいて、ウワッハッハと笑った。

「もちろん、待ってるわよ。ひと眠りして、スタミナをたくわえておくわね」

くると寝返りをうったが、すらっと伸びきった背。張った膚におヒップのかっこうがとてもよかった。

「これ以上、たっぷりとスタミナをたくわえられちゃあ、あとが思いやられるってもんだな」

口ではいったが、顔は笑っている。そして、あらわなおしりの辺りをパシンとたたいておいて、大股に譲二はバスルームのほうへ歩きだしていたのだった。

「何時間ぐらいで、帰ってこられるの？」

シャワーを浴びてもどってきた譲二に、まださっきのままのオールヌードで、女がたずねた。

「そうだな。早ければ一、二時間ぐらいだろうが、もしかすると朝までかかるかもしれない」
パンツをはき、ズボンをつけ、逆三角形で隆々たる上半身にいきなりワイシャツを着る。

「朝まで？ そんなにあたしを待たせるつもり？ いまの妙な信号は、ほかの女からじゃないんでしょね？」

うたぐり深そうに、女が見あげた。

「よせよ、たしかに仕事だ。仕事のはじまったら、いくらおれでもマワシを取ってるひまはねえんでね」

いままで腰に巻いていた厚手で大きいタオルを、全裸の女の上にふわっとほうると、

「だから、つまらない取り越し苦労はしないで、ゆっくり待っていてくれ。そんなかつこうしてて、ご大切なところを冷やさねえようにな」

女の下半身のあたりを指さし、

「では、バイバイ。ちょっくら行ってくるぜ」

女に近づき、まくらの下からコルト六号を引っ張り出してベルトに突っ込み、ついでに女の形のいいくちびるを思いきり吸った。

「竜からのお呼びとあれば、何か相当なことが起こってるんだらう。としたら、朝までに帰れるかな？……」

廊下を大股で歩きながら讓二がつぶやいたが、朝どころか四日や五日は帰らなくなつて、女のことはいっこうに心配はない。なぜなら、ホテルの部屋はあすの朝まで借りてあるだけだし、荷物なんて何ひとつ置いてない。で、もどらなくてもいいわけだった。

「ちよいと出かける。部屋に女が残ってるが、ゆっくり休ませてやってくれ」

クロークのところで、カウンターの^上へ無造作に一万円札を二、三枚置くと、

「とりあえず、これだけ払っとく。あの女があす帰るようなら、つりは渡してやってくれ。やわらかいレスリングの実演料だといってな」

係の男に、片目をつむってウインクした。

「は、はあ、承知しましたです」

その声を背に、玄関のほうへ歩きながら、

「払うもんはちゃんと払う。ただマンの食い逃げはシツレイってもんだ。だが、悪くなかったよ、あの女は。もっとも、向こうだって同じだったろうがね」

ウワッハッハと声を立てて、面白そうに笑ったのだった。

3

「ほほう、そうだったのかい。としたら、とても朝までに帰れそうもないな」

ちよいと豪華なマンション風の建物の一室。譲二は竜崎三四郎と向かい合って、深いイスに腰かけていた。

「朝までに？ また、待たせてあるのか、可愛い子ちゃんを？」

「お察しのとおりさ。だが、いいんだ。アッチのほうはもうおねがいしちまった。もっとも、これから二回戦ってとこだったがね」

「あいかわらず、手が早くてタフだな、おまえは」

「それでもねえさ。ダブルベッドは二人で使ったほうが、むだがねえと思ったただけだ。おまえは、そのむだを年中してるらしいがね」

のぞきこむように、ニヤリと三四郎を見つめた。

「よせ、こいつめ。おれはむだだなんて思ったことはない。せつかくの広いベッドを、わざわざ狭くする必要はないと思ってるがね」

三四郎がまごついたように、手を振る。

「もったいねえ男だよ、おまえは。もしその気になりゃあ、おれの何倍か女の子にモテるし、よりどりみどりのになあ」

これは事実で、どこへ行っても若い女にモテるのは三四郎。女好きの譲としては、やっかみたくなるほどだったが、譲とちがって三四郎は、そういう女たちのご好意を、冷淡なぐらい無視している。譲ではないが、まったくもったいない男であった。

「そういうのは、そっちに任せる。目下のおれは女なんかより、仕事のほうに興味がある。といったからって、おれも立派に男一匹。女がきらいてわけじゃないぜ」

不能だったり、男のほうにひかれる、いわゆる変態でないことを、ハッキリと表明した。

「分かった、分かってるよ。おれと違って、おまえは女の好みが難しい。まだ、そういうのにぶつからねえってわけか？」

「まず、そんなところだ。しかし、いずれはぶつかるだろうがね」
うなずくと、

「ところで、女の話をおまえとしてるときりがない。仕事の話にとりかかるか」

三四郎が、話題を変えた。

「ああ、そうそう。それで呼びつけられたんだっけな、おれは」

思い出したように譲がいったが、ここで二人の正体を説明しておく、どちらもASP、つまりアジア・シークレット・ポリス（秘密警察）の腕きき部員で、その所属ナンバーは0077に0078。もつとも二人だけでなく、ASPの部員たちは名を呼ばれず、いずれも番号で身分証明をされている。

そのASP部員たちの中でも、この二人は腕きき中の腕きき、いうなれば不死身のタフガイとして有名で、それだけに、本部から指令されてくる事件は、いわゆる難事件中の難事件ばかりだったが、それくらいでびくりする二人ではなかった。その証拠に、いままで何度か、ほかの部員たちがサジを投げ、音をあげた事件を、二人は軽く解決していたのだった。

そして、この二人だけは、本部から特に自由行動を許されていて、指令があるとき以外は、どこで何をしていようと、かって気ままであった。その代わり、一度指令を受けると、愛用のオートマチック・ルガーとコルトを握って、その行動は電光石火。いかなる強敵だろうと一步も引き下がらず対決する。味方にとっては頼もしいが、敵にとってはこの上もない、やっかいなる人物といえたらう。

その二人に、本部から、ついに指令がきた。とすれば、もちろん、ほかの部員たちの手に余る難事件に決まっている。はたしてその難事件とは？……

「すると、二つの事件をいっぺんに解決しろというんだな、本部では？」
譲二こと、コルトの譲が聞いた。

「早くいえばそうなる。本部では、おれたちの手や脚が五、六本もあると思ってるらしい」
三四郎が笑った。

こっちは別の名を抜き撃ちの竜。抜く手も見せぬルガーの早撃ち。しかも、決して相手を殺さず、いかなる場合でも、肩とか手首とかをぶち抜くという、神業に近い正確無比なガンさばきだった。

「ついでに、頭も二つずつなら、まるでバケモノだぜ」
譲も声をあげて笑う。

「まったくだ。おまえのようにかわい子ちゃんにモテる男を、バケモノ扱いはシツレイだな」
「よせ。そういうおまえだって」

うっかりいいかけ、

「おっと、やめとこう。あんまりしつっこくいって、ゲンコツをくらったら、せっかくの色男が台なしになる。おまえのゲンコツはひどく効くからな」

急いで手を振ったところを見ると、一度か二度くらい、女のうわさをしつっこくして、三四郎のゲンコツのお見舞いを受けたことがあるらしい。

「そのとおり。当分、女の話は鬼門だと思ってくれ」